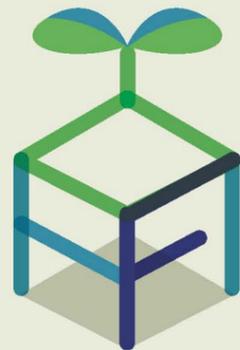
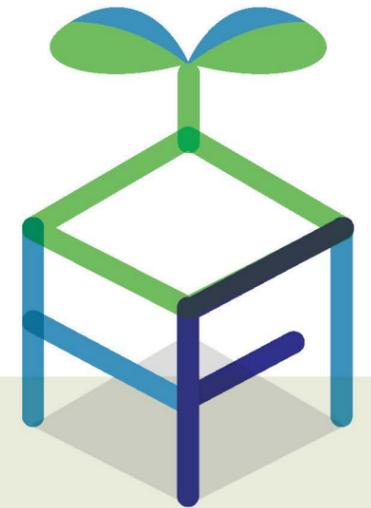


ひょうご・ふるさと ミュージアムプロジェクト



私たち
プロジェクトチームに
お気軽にご相談ください

ひょうご・ふるさとミュージアムプロジェクト

2015年11月7日発行

編集：ひょうご・ふるさとミュージアムプロジェクトチーム

(上田萌子・高木俊・菊池直樹)

責任編集：上田萌子

発行：兵庫県立人と自然の博物館

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

TEL：079-559-2001 FAX：079-559-2007

WEB：<http://www.hitohaku.jp/>

デザイン：大本紗緒理

27教@2-018A4

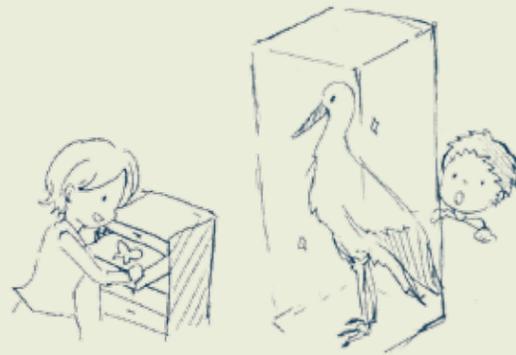


収蔵庫から地域へー

20年かけて収集した様々な標本や資料を地域で活用します

2012年、ひとはくは本館2階に、魅せる収蔵庫トリアル「ひとはく多様性フロア」を新たに開設しました。ひとはくが20年かけて収集した昆虫や植物、鳥類、化石、岩石、鉱物、古写真などの実物標本やレプリカを壁面や陳列ケースに展示しています。

ひとはくは、これらの標本や資料を活用し、地域の方々にこれらの魅力を体験していただく機会をつくります。



昆虫標本



動物標本



魚類液浸標本



キノコ標本



植物模型



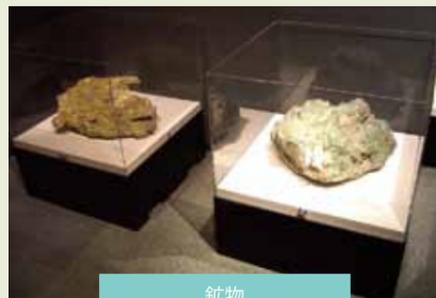
古写真



恐竜化石(レプリカ)



岩石



鉱物

下からのぞいて見ることができる昆虫拡大模型やさわれる実物標本などもございます。



移動博物館車「ゆめはく」が地域に出かけていきます

標本や資料が持っている迫力やおもしろさを地域の方々にもっと知っていただきたい。

そんな思いから、2012年、移動博物館車「ゆめはく」が誕生しました。「ゆめはく」が出かけて行けば、駐車スペースだけで展示が可能です。様々な標本や資料をのせて、あなたの地域へ出かけていきます。



様々な場所で活動中！

2012年の誕生以来、ゆめはくは、学校や公園施設など多岐にわたって活動中です。とくに、遠方の学校施設などでご好評いただいています。



学習テーマに応じた展示内容

昆虫や化石などの分野設定のほか、「〇〇地域の自然・文化」といった地域ごとのテーマ設定も可能です。どうぞお気軽にご相談ください。



展示と組み合わせたセミナーも

ゆめはくの周りのスペースなどを利用し、セミナーを実施することで、学習効果が高まります。



※ゆめはくの運用に必要な経費をご負担いただく場合がございます。

ひょうごの 自然・環境・文化の魅力を 地域の方々とともに伝えたい

ひとはくは、地域資源を調べて学習や利用する活動を展開する団体の方々と連携し、ひょうごの自然・環境・文化の魅力を県内外に広く伝えていきたいと考えています。

そこで、長年県下でともに活動していただいている団体の方々にその取り組みをお話いただきました。これからも、たくさんの方々との連携の輪が広がることを期待しています。



古写真展の会場



ふれあい喫茶との同時開催



博物館実習生との活動

地学の魅力を広めたい 南あわじ地学の会

ひとはくの連携窓口：古谷裕 聞き手：上田萌子



南あわじは化石や地層の魅力が満載

南あわじ市を拠点に、化石や地層の調査・展示活動をおこなっています。天文や地震なども対象とし、幅広く地学に関する活動を展開しています。南あわじ市には、和泉層群という中生代白亜紀後期(約7000万年前)の地層が広く分布しており、アンモナイトや貝類など、多様な化石が産出しています。2004年には、陸上で暮らしていた翼竜と恐竜の化石も、淡路島の和泉層群から発見されています。実際に地層を眺め、自分自身の手で化石を発掘すると、教科書では得られない喜びがあります。

2000年に開催された淡路花博の化石展示ボランティアに参加したメンバーが中心となり、旧緑町の化石発掘事業に関わることになり、発掘作業や化石の保管に協力して取り組める体制が必要になったため、「南あわじ地学の会」が発足しました。現在は、南あわじ市教育委員会と連携して、活動を進めています。

地域の化石標本の受け皿に

毎年、夏休み前半の2週間程度、南あわじ市にある商業施設「パルティ」の一角で、化石や天体など地学に関する展示会を開催しています。南あわじ市教育委員会が所有する化石標本のほか、個人で化石収集をしている方やひとはくからも標本を提供してもらい、展示をおこなっています。展示会には地元の方が多く訪れるので、南あわじの化石の面白さを知ってもらいたいと考えています。

小学校が廃校になるなどして、すでにある化石標本が行き場を失った際の受け皿となることも、会の大きな役割の一つです。

学校や公民館、あるいは個人の方がお持ちの情報を収集し、地域の化石標本を受け継いでいきたいと思っています。

ひとはくとは、対等な立場での連携関係

ひとはくとの関係は、旧緑町の化石発掘事業と一緒に携わった時から、10年以上続いています。ひとはくが淡路島で調査などをする際には協力し、地学の会が活動する際には相談に乗ってもらっています。対等な立場で、専門的なことを気軽に相談できる現在の連携関係を、今後も続けていきたいです。また、ひとはくには地学以外の専門家もいるので、幅広い分野でお付き合いができればと思います。

細く長く活動を続ける

2015年のパルティでの展示期間中に、一般の方からナウマンゾウの可能性のある切歯破片1個を受け取るようになりました。これは、地学の会が情報発信や普及啓発活動を細く長く続けてきた成果だと考えています。このように活動を続けていけば、地元の情報が手に入り、行き場を失った化石たちの受け皿になることができます。

南あわじ地学の会の名前に「南あわじ」と入っているのは、南あわじが活動の中心であることの表れです。他の場所に行って活動することがあっても、その成果は南あわじに還元していきたいと思っています。

地域での古写真の収集と展示 三河地域づくり協議会

ひとはくの連携窓口：赤澤宏樹 聞き手：大平和弘



小学校区単位でのまちづくり

佐用郡佐用町における「三河地域づくり協議会」は、行政と住民が互いに協働したまちづくりを実現するため、2006年7月に発足した地域の自治組織です。概ね小学校区単位の地域住民で組織され、7つの集落自治会を包含しています。過疎化や高齢化といった集落の課題を、小学校区というやや広い地域全体でカバーし、まちづくりの担い手確保や自治機能の維持・増進につなげることを目的としています。

三河地域づくり協議会では、地域の豊かな自然環境や、伝統文化などの特性を活かし、誰もが住みたい、住んで良かったと思える活力ある郷づくりを目指して、ふれあいや文化活動、健康増進や防災防災、新たな生業体制の試行などの活動に励んでいます。

ひとはくと連携した古写真の収集

ひとはくでは、人と自然の関係を記録することを目的に、個人が所有するアルバムに収められた古写真を県内各所で収集していることから、三河地域づくり協議会でも、ひとはくからの呼びかけで、2008年頃より古写真の収集をはじめました。アルバムごと提供者からお預かりした古写真をひとはくに渡すと、スキャンされたデジタルデータがひとはくの資料として収集されるとともに、現物とデジタルデータを提供者にお返りする仕組みになっています。収集をはじめてすぐに、写真が趣味だった方から、たくさん古写真を提供いただけたこともあり、次第に提供いただける方が増え、2015年現在では1,000点を超える古写真が三河地域で収集されています。

毎回盛況のみかわ古写真展

2009年、三河地域づくり協議会の活動拠点となる「三河基幹集落センター」の開館記念イベントとして、収集した古写真を展示する「みかわ古写真展」を開催する運びになりました。ひとはくより古写真のプリントと額縁に入れる展示コンテンツ化の支援を受けて、会館内に古写真を展示し、お茶やお菓子な

どで楽しみながら交流できる「ふれあい喫茶」を同時に開催しました。当日は大盛況となり、古写真を前にあちこちで昔懐かしい思い出話に花が咲きました。このイベントをきっかけに、ひとはくと連携した古写真展を年1回開催することとなり、現在も続いています。毎回異なる地域の古写真を見ることができると、7つの集落各所から足を運んでくれて、地域の交流促進につながっています。また、古写真展の開催に合わせて遠方より見に来てくれたお孫さんなど、ふるさと意識の継承にもつながっていると感じます。

古写真から地域のまちづくりへ

古写真展を続けていることで、古写真を提供いただける方が次第に増えました。また近年は、地域づくり協議会のふれあい部会のアイデアで、古写真だけでなく現在の写真を展示する試みもはじめています。各集落のまちづくりの活動風景の写真を展示したり、ひとはくの博物館実習の大学生と一緒に、古写真の風景と全く同じアングルから現在の写真を撮影し、古写真と現在の様子を比較する展示もおこないました。

このような古写真展は、2010年に策定した三河地域づくり協議会のまちづくり計画書にも、「ふるさとの誇りを育む郷づくり」の一環とした事業に位置付けています。古写真を通じた地域のふれあいや、地域で大事にしたいふるさと意識を、今後のまちづくりに活かしていきたいと考えています。



パルティでの展示会



一般の方から受け取った化石



ナウマンゾウ化石
(南あわじ市産出)



三河地域まちづくり計画

高校生が発信 きのこの魅力

兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班

ひとはくの連携窓口：三橋弘宗 聞き手：黒田有寿茂



>>> きのこから探る六甲山の豊かな自然

六甲山の再度公園を拠点として、きのこの観察や採集をおこない、たくさんの標本を作製して展示をおこなってきました。また、観察結果をもとに、きのこの分布や出現種数、環境条件との対応、予測される種数など、様々な解析に挑戦しています。きのこの多様性を明らかにすること、展示や研究発表を通じて地域の豊かな自然を多くの人に知ってもらうことが活動の目標です。きのこの採集や同定は、兵庫きのこ研究会の方々に指導していただきました。きのこのほかにも、学校の横を流れる石屋川で生物調査をおこなうなど、活動テーマは自然環境全般にわたっています。

>>> 高校生たちが展示や研究発表で活躍

高校の文化祭をはじめ、ひとはくや神戸市立森林植物園、御影クラッセで定期的な展示をおこなってきました。展示会場では、部員が解説を担当。展示の広報やパネルで使うポスターも、美術部を兼部している絵の好きな生徒が作成しています。

全国規模の学術的な会合にも積極的に参加しています。日本生態学会、日本菌学会、日本植物学会、全国高等学校総合文化祭などで研究発表をおこないました。発表練習は大変ですが、練習を通じて発表が上達しました。ただ、異なる視点からの質問や想定外の質問には、まだ対応できない場合もありますが、良い経験になりました。

生徒の入部動機には、「御影高校にしかない部に入ろうと思って入部した」、「中3の高校見学の際、文化祭でキノコが大量に展示されていて、驚いて入部したいと思った」という声があります。また、「自然観察や採集だけでなく、展示作成や研究発表など色々な経験ができて、ためになっている」、「将来結婚して子どもができたなら、自然の美しさや大切さを伝えたい」と語る生徒もいます。生物や自然環境に深く関心をもち、熱心に取り組む生徒が入部することで、部の活動が発展することを期待しています。

>>> ひとはくによる標本作成指導

御影高校とひとはくとは、総合学習の授業がきっかけで連携が始まりました。封入標本、町のジオラマ、植物標本などの作成で指導を受けました。これらの作品は、今も学校内で展示しています。特殊な技法によるキノコの標本づくり、データ解析や展示作成、六甲山の植生についての講座などでも、お世話になりました。科学技術振興機構のSPP事業（サイエンス・パートナーシップ・プログラム）への応募が採択されてからは、きのこ研究会やひとはくとの本格的な連携が進みました。

ひとはくには、キャラバンや館外講師を積極的におこなうことで、多くの人に博物館活動を知ってもらい、展示などを見てもらう努力を続けていってほしいと思います。また、人口密度の高い神戸地域南部では、ひとはくの露出度は必ずしも高くないように感じます。こちらでもぜひ、積極的に事業を展開してほしいです。

>>> 地域とのつながりを大切に

平成24年に秋篠宮殿下がひとはくを御視察された時の展示解説、平成25年のNHK特番「嵐の明日に架ける旅～希望の種を探しに行こう～」への出演は、マスコミを通じ広く社会に発信され、環境科学部の取組みが地元にも広がるきっかけとなりました。地域とのつながりを保つという意味でも、環境科学部の活動が今後も継続できればと思っています。



ひとはくでの展示解説



ゆめはくでの展示



御影クラッセに展出



子どもたちの環境体験学習



炭焼き



間伐作業

森づくりを楽しむ

森林ボランティア 菊炭友の会

ひとはくの連携窓口：石田弘明 聞き手：高木俊



>>> 川西市・黒川のエドヒガンと里山をまもる

2005年3月に発足した「菊炭友の会」は、野生の桜・エドヒガンが群生する川西市・黒川の桜の森を拠点として、森林整備ボランティア活動をおこなっています。60年近く放置され、ネザサが生い茂り、高木に蔓が絡む里山林を、下草刈りや伐採をおこなうことで、明るい雑木林に復活させるとともに、伐採したクヌギで炭焼きを実施してきました。現在では新たに、クヌギ放置林の再生、学習の森づくり、エドヒガンの救出・育成、自然体験学習の企画・運営もおこなっています。現在の会員は50名を超え、整備活動だけでなく、植物観察会など里山を楽しむ活動も実施しています。

>>> きっかけは「炭づくりを楽しみたい」

NPO法人シニア自然大学主催の「菊炭生産体験講座」の修了生が集まり、講座終了後も炭づくりを楽しむ場がほしい、という思いから活動が始まりました。当初は大阪府能勢町などで活動をおこなっていましたが、現在の活動拠点である黒川地区の里山整備活動の話を持ちかけられ、2006年から「黒川・桜の森」と名付け、整備活動を始めました。

>>> ひとはくと連携した植物調査

もともと炭づくりの会として始まったことから、里山管理を行う上で動植物の知識が不足していると感じていました。そこで、ひとはくに里山整備に対する助言を求め、植物を中心とした調査が始まりました。林内に設置した調査区で、ネザサを刈って整備をおこなった結果、植物種数に増加が見られました。また、老齢木が多くなっていたエドヒガンの若木を再生するにはどうすればよいかを相談したところ、まだよくわかっていないことなので、一緒に調べてみるようになりました。エドヒガン保全のための調査は現在も続いています。

最近では植物の観察会などをやっていますが、森の中では植物だけでなく、様々な生きものに出会います。また、ナラ枯れや害虫の発生など、色々と森の変化に気づくこともあります。このよう

とき、生きものに詳しい専門家との交流のなかから、少しずつでも生きものの知識を増やすことができればと思っています。ひとはくには、ぜひここを研究の場として活用してもらいたいです。

>>> 活動の継続が市民の関心を高める

発足当時は趣味の会としての位置づけでしたが、桜の森の整備活動を始めてからは、目的をもったボランティアの会というかたちに変わり、こうした変化には反対の意見を持つ会員も中にはいました。また、30数名の地権者の中には、他所から人が入って活動することに抵抗がある方もいたようです。しかし、活動を続けていく中で、こうした関係は徐々に和らいでいきました。時間をかけて活動を続けていくことで、川西市民にとっても菊炭やエドヒガンへの関心が高まっているように感じます。

桜の森の森林整備が一段落つき、これからはより里山を楽しむ活動もおこなっていきたいと思っています。明るく風通しの良い、子どもの声がきこえる森をつくっていききたいです。

「菊炭友の会」ホームページ URL：<http://kikuzumi.exblog.jp/>



エドヒガン（黒川・微笑み桜）

恐竜化石で地域を元気にする 上久下地域自治協議会

ひとはくの連携窓口：池田忠広 聞き手：上田萌子



丹波竜の発見からまちづくりが始動

丹波市山南町上久下地区で、恐竜化石などの地域資源を活かしたまちづくりを進めています。2006年、上久下地区を流れる篠山川の川岸で、1億4千万年～1億2千万年前の白亜紀前期の地層から、当時生息していた竜脚類の大型草食恐竜ティタノサウルス形類とみられる化石が発見されました。体長は十数メートルと推測され、国内最大級と考えられています。この草食恐竜には、「丹波竜」という愛称が付けられ、地域内外に親しまれています。

この発見を契機に、地区内に「地域づくり検討委員会」が発足し、その後「恐竜の里づくり部会」と名称を変え、恐竜化石を含む地域資源を活かしたまちづくりの企画から実行までの一貫した活動が始まりました。化石発見地のほど近くに、活動拠点となる「元気村かみくげ」を整備し、化石発掘体験などの学習ができる施設を設けました。化石発掘体験や飲食・物品販売などの収益事業を担う企業組合「元気村かみくげ」も立ち上げ、その収益をまちづくりや地区の行事など、地域の活性化のために活用しています。

子どもも大人も夢中 化石発掘体験

化石発掘体験は、子どもから大人まで、たいへん人気のある取り組みです。丹波竜の骨片のほか、小動物の化石や恐竜の卵のかけらが見つかることがあります。なかには、獣脚類の歯の化石を発見した地元の小学生もいます。発掘体験の指導員は、化石に関心があることに加え、化石を活かしたまちづくりに意識のある住民メンバーが担っています。

2015年には、丹波竜の実物大モニュメントを目玉とした恐竜広場を整備するなど、人が集える場づくりを進めました。また、丹波竜を題材としたファミリーフォトコンテストの開催など、新たなまちづくりのアイデアを試行しています。一方、地域の自然風景を維持しながら、お年寄りが健康で元気に過ごせる地域をつくっていききたいと考えています。



化石発掘体験



発掘体験の指導



丹波竜実物大モニュメント

化石の発掘・研究を担うひとはく

実は、恐竜化石が発見されるまで、ひとはくの存在を知らない住民もいました。化石の発見がきっかけとなり、ひとはくに鑑定を依頼しに行ったことで、関係がスタートしました。ひとはくが実施した化石発掘調査に地域住民がボランティアとして参画し、そのメンバーが現在、化石発掘体験の指導員を担っています。ひとはくが発掘調査や研究を担い、丹波市が財政的な支援をおこない、発掘ボランティアなどに地域住民が協力するという連携関係が、現在の成果につながっていると思います。博物館というと、敷居が高く感じることもあるでしょうが、ひとはくの敷居はあまり感じていません。いつでも気軽に相談や情報交流ができる関係をつくっていききたいです。

恐竜だけに頼らないまちづくりも

恐竜化石は、まちづくりを後押しする大きな発見でした。恐竜化石が発見されたことで、地域の活性化に関わりたい人たちが集まってきました。恐竜が出てこなければ、地域はここまでまとまらなかったかもしれません。一方、発掘調査が一段落し、来年の2016年は化石発見から10年の節目を迎えます。これからは恐竜だけに頼らないまちづくりも検討が必要だと考えています。上久下を訪れた方に、様々な楽しい体験をしてもらえるようなソフト面の活動を充実させていききたいです。



大沼での自然案内



ワークショップ



実地訓練

観光と自然が共存できる地域へ 一般社団法人 ハチ北高原自然協会

ひとはくの連携窓口：高橋晃 聞き手：上田萌子



ザゼンソウ

ハチ北の自然を観光資源として活用する

兵庫県西北部の香美町にあるハチ北高原で、自然を保全しながら、観光資源として持続的に活用する取り組みをおこなっています。関西でも屈指の豪雪地帯であるハチ北高原では、県指定天然記念物のザゼンソウ群落など、関西ではめずらしい植生を見ることができます。また、ハチ北には兵庫県に10種類のホタルがすべて生息するなど、豊かな自然が残っています。

ハチ北高原はもともと但馬牛の放牧場で、50年ほど前からはスキー場に利用されています。ハチ北高原自然協会の会員は地元の住民で、スキー場運営などの観光事業に携わる人が多くいます。スキー以外にも、ハチ北の自然を活かした観光を進め、ナチュラルリストを育成していくことが、会の大きな目標です。「ハチ北を訪れたお客さんに、自然を案内できるようにになりたい」、「花の名前を聞かれたら、答えられるようにになりたい」そんな思いで活動を続けています。

自然案内と自然再生のころみ

会の主要な活動の一つが、「ハチ北自然案内人」です。ハチ北高原の大沼は、関西でも有数の高原湿地で、四季を通じて様々な山野草や木々を見ることができます。ここで、観光客の方向けに植物の観察会を実施しています。観察会では、ただ見るだけでなく、におったり、さわったり、食べてみたり、五感を使って体験していただきます。観察がしやすくなるように湿地内に木道を設置し、湿地に対する関心や愛着をもっといただく工夫もおこなっています。また、ハチ北の豊かな自然を象徴する多種多様のホタルを観察するイベントも開催しています。暗闇に何百というホタルが飛び交う様子は圧巻で、お子さんから大人の方まで多くの方々が参加します。自然案内の活動に加え、かつてハチ北に生息していたウスイロヒョウモンモドキというチョウを復活させるため、幼虫が食べるオミナエシなどの草食性植物を植える活動もおこなっています。

ひとはくによる「ハチ北自然案内人」養成講座

ひとはくには、「ハチ北自然案内人」を養成する講座の講師を担当してもらいました。講座は3年間実施し、会員が自分の話せるネタを習得できるよう、ワークショップや実地訓練を重ねました。今では、80名ほどの団体向けに案内をこなす会員もいます。地域外の専門家から教えてもらうことで、ハチ北の自然のよさを知ることができました。養成講座は終了しましたが、現在も春と秋にハチ北高原で一般向けのセミナーを共催するなど、ひとはくの連携関係は続いています。

最近では、沼の乾燥化によってザゼンソウが弱っていたり、オミナエシがシカの食害を受けるなど、新たな問題が起っています。これらの問題に対して、今後も専門的な見地からアドバイスを受けたいと思っています。

地域内外への働きかけが課題

今後の課題の一つは、地元の自然に対する地域内の関心がまだ十分でないことです。地域の資源を知る努力がもっと必要だと考えています。また、ひとはくとの共催によるセミナーの参加者が、比較的植物に詳しい層に固定化しているため、新たな層を呼び込む工夫も必要です。自然を活かした観光で地域を盛り上げ、観光で得た利益を自然の保全に活かすという循環を実現していきたいと思っています。



手づくり案内ガイド